

晩秋を迎えた自宅兼カフェ「やきや」の裏庭を歩く永田勝之さん(右)と妻の温子さん。飼っているヤギとふれ合う。6日、札幌市西区小別沢



紅葉が進む山に囲まれた小別沢地区（事前）。空から見ると三角山（中央）の奥に類似地区の市街地が広がり、街の近くに「里山」があることが分かる。4日（本社へりから）

札

札 幌市中心部から西へ車で25分ほど。中央区宮の森の住宅街の裏山にあるトンネルを抜けると、森林に囲まれた農村が広がる。西区の小別沢地区は、33世帯58人が暮らす札幌の「里山」だ。

「同地区の市民農園「さつやま農園」で9月中旬、収穫祭が開かれ、地区内外から約15人が参加した。親子で訪れた中央区の会社役員佐々木亮太さん(39)は「うちとは草一本で楽しそうに遊んでいる。その姿を見て」と「おもちやお金をかけるのは何のため」と思ってしまう。ここに全部あるじゃん。」と話した。

「うさぎの糞を飲んだら、一瞬のうちに」
ラバの糞を飲んだら、池でお水生
じゃくしゃを見たときのが楽。かき
食べた。畑でよく野菜を食べて、精
食でおいしかった。大人になつても
野菜を作つていたと舌を理した
町屋を運ぶ。「やまぐしをいじ」
代表の水田勝さん73は、日高西川
浦野町出身の旧沼尻農家子目で、建
業東京大学の大学卒業生。関東
の共同自治協会で建築設計事務所を勤
め、その後、1984年に「自然都市市
民会」の一員として小別荘に移住した
以來、本菜に加え農薬のカフェエ連
子ももの湯に帰つくりながらに携わっ
た。

「やまのかいしゃ」は市民農園の運営のほか、森林整備の見学会や地域内外の人が語り合う「里山会議」、札幌静修高校の農業実習受け入れなどさまざまな取り組みを手がけている。

高齢化や担い手不足で管理の行き届かない農地や森林が全国的に増えている。札幌市は2019年、小別沢を「里山活性化推進事業」のモデル地区に認定。23年度からは、地域主体の取り組みに補助金を出し、里山の維持を後押しする。

今年は札幌市内でもヒゲマの出没が相次ぎ、10月末時点で310件に達し過去最多となっている。クマが暮らす山林と市街地を隔ててきた緩衝帯である里山が、人口減少による離農などで荒廃したことも影響していることがみられる。

小別沢で40年以上暮らす永田さんは「いまは都市と里山が隔絶されている。都市生活者がかつと気軽に里山に来て、農林業に親しめるようにしたい。だからこそ、大自然と都市の中間にある里山の存在意義」と強調する。

通じた地区の将来像の模索はこれからも続く。「過疎や温暖化などさまざまな問題もある。里山は都市文明を再考する拠点になる。いろんな人が集まって語り合い、解決の糸口を小別沢から提起できたら面白い」

（写真映象部 岩崎 中島 隆一 朗）

デジタルに

動画と特集

11